

くくろひらしま
求来里平島遺跡

2002年

日田市教育委員会



調査区周辺の航空写真（東から）



調査区の航空写真（真上から）

序 文

日田市教育委員会では、平成5年度より県営広域営農団地農道整備事業（日田地区）に先立つ発掘調査を行ってまいりました。

今回報告します求来里平島遺跡の調査では、縄文時代や古墳時代の住居跡などが発見されました。

なかでも、古墳時代の竪穴住居は中期（5世紀）のもので、日田盆地では初現期のカマドをもつ住居として注目されます。

こうした埋蔵文化財資料によって、求来里川上流域での私達祖先の営みの一部を垣間見ることができます。

本書が、求来里地域の歴史の解明や、埋蔵文化財の普及・啓発の一助として、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりましてご協力を賜りました地元関係者や、農業関係機関の方々、さらには作業員の皆様方に、心から感謝を申し上げます。

平成14年12月

日田市教育委員会

教育長 後 藤 元 晴

例 言

1. 本書は、平成5年度に日田市教育委員会が大分県日田地方振興局からの委託を受けて発掘調査を実施した求来里平島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（県営日田地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4）である。
2. 本書で報告するのは、発掘調査を行なったB・C地区分についてのみ掲載する。
3. 発掘調査にあたっては、大分県日田地方振興局耕地課、日田市農政課、地元の全面的なご協力を得た。
4. 調査現場での遺構実測・写真撮影は土居と森山、遺物実測及び遺構・遺物の製図は土居が行った。
5. また、航空写真は有限会社スカイサーベイに、遺物写真は雅企画有限会社 長谷川正美氏に撮影委託し、その成果品を本書で使用した。
6. 図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
7. 本書に使用した遺構図の方位は、全て磁北である。
8. 出土遺物および図面類については、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の作成にあたっては、今田秀樹（天瀬町教育委員会）氏のご指導・ご協力を得た。
10. 本書の執筆・編集は、土居が行った。
11. 題字は、原田良伸氏の揮毫による。

本文目次

I	はじめに	1
	(1) 調査に至る経過	1
	(2) 調査経過と調査組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
	(1) 遺跡の位置と地形	3
	(2) 歴史的環境と周辺の遺跡	3
III	調査の内容	5
	(1) 調査の概要	5
	(2) B地区の遺構と遺物	6
	(3) C地区の遺構と遺物	13
IV	まとめ	16

挿図目次

第1図	広域営農団地農道路線図 (1/40,000)	1
第2図	周辺の遺跡分布図 (1/10,000)	4
第3図	調査区周辺の地形図 (1/500)	5
第4図	B地区遺構配置図 (1/100)	7
第5図	1号A・B竪穴住居跡実測図 (1/40)	8
第6図	1号A竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	9
第7図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	10
第8図	1号竪穴住居跡出土石器実測図 (2/3)	10
第9図	2号竪穴住居跡実測図 (1/40)	11
第10図	1号竪穴実測図 (1/30)	12
第11図	2号竪穴住居跡・1号竪穴出土土器実測図 (1/3)	12
第12図	C地区遺構配置図 (1/100)	13
第13図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	14
第14図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	14
第15図	1号建物実測図 (1/60)	15
第16図	攪乱坑出土土器実測図 (1/3)	15
第17図	日田盆地の縄文時代の竪穴住居跡 (1/120)	16

表 目 次

第1表 出土遺物観察表 (土器)	20
第2表 出土遺物観察表 (石器)	20

図 版 目 次

巻頭図版 (上)	調査区周辺の航空写真 (東から)
(下)	調査区の航空写真 (真上から)
図版1 (上)	B地区の航空写真 (真上から)
(下)	C地区の航空写真 (真上から)
図版2 (上)	B地区1号竪穴住居跡の発掘状況
(下)	B地区1号竪穴住居跡の発掘状況
図版3 (上)	B地区1号竪穴住居跡カマドの発掘状況
(下)	B地区1号竪穴住居跡カマドの完掘状況
図版4	B地区1号竪穴住居跡出土土器・石器 C地区1号竪穴住居跡出土土器・攪乱坑出土土器



発掘調査作業風景

I はじめに

(1) 調査に至る経過

県営広域営農団地農道は、熊本県小国町を起点に大山町や天瀬町を經由して日田市と結ぶ県内総延長約28kmの地域農業振興対策事業として昭和56年に事業計画決定され、翌年より工事が着手された。このうち日田市内ルートについては、市内東部をほぼ南北に縦断する形で南の県道岩戸五馬日田線から北は市道葛原線までの延長約8kmが路線計画され、現在工事が進められている。

こうした農道建設に先立つ平成4年5月には、大分県日田地方振興局長名で路線計画予定地のうち、求来里地区と日高地区の埋蔵文化財所在についての照会文が提出され、これを受けて大分県日田地方振興局耕地課と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取扱いの協議を行ったところ、求来里地区については事前の試掘調査を行うこととなった。

こうした経過を踏まえて、予定路線内の稲刈り後の平成4年10月26日から11月16日までの間試掘調査を行い、その結果、古墳時代の竪穴住居跡や柱穴などの遺構が検出された。このため、再び遺跡の取扱いについての協議を両者間で行ったが、計画の路線変更が不可能なことから、次年度に記録保存のための発掘調査を実施することとまとまった。

平成5年4月28日には大分県知事名による埋蔵文化財発掘の通知が提出され、同5月1日付けで発掘調査業務の委託契約を締結し、同5月12日より本格的な発掘調査を開始した。

ところが、その後に工事区間の延長工事が計画されたことにより、急遽発掘調査中の西側の試掘調査を行うこととなり、この試掘調査でも遺構が検出された。そこで、新たな遺構の取扱いについての再協議を重ね、発掘調査の対象地域を追加することとまとまり、すでに発掘調査を開始した場所をA地区、追加場所をB・C地区と呼ぶこととし、委託契約の追加変更を行い、B・C地区については翌年2月から現場作業を実施した。



第1図 広域営農団地農道路線図 (1/40,000)

(2) 調査経過と調査組織

B・C地区の発掘調査等の経過については、調査日誌にもとづき略述する。

2月14日／作業員を使って、遺構検出を開始する。

17日／B地区の竪穴住居跡、C地区の竪穴住居跡等の掘り下げを始める。

18日／B地区の測量を行う。

21日／空撮のための清掃を行う。

22日／空撮を行う。器材を洗い、撤去する。

23日／測量を行い、調査を終了する。

3月18日／整理作業を完了する。

なお、調査関係者は、次のとおりである。（職名は当時のままとしている。）

平成5年度（発掘調査、整理作業）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤 正俊（日田市教育委員会教育長）

調査事務 原田 良伸（日田市立博物館長）

阿部 正義（日田市立博物館次長）

羽野 恭子（日田市立博物館臨時職員）

調査員 土居 和幸（日田市立博物館学芸員） B・C地区調査担当

行時 志郎（日田市立博物館学芸員） 試掘調査、A地区調査担当

森山敬一郎（日田市立博物館嘱託）

発掘作業員 松尾 新吾、秋 ヤエ子、足立アキノ、足立 貞子、足立 絹子、穴井キミ子

穴井 清香、諫山三代子、井上ノブエ、河津 稔子、北澤 幾子、五島 英司

酒井 光敏、佐藤カスミ、中野カズエ、中野ヨシ子、毛利十四男、渡辺 義夫

渡辺芳五郎

整理作業員 石松 京子、小野 敦、財津 朱美、田中 静香、聖川 暢子

平成14年度（報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤 元晴（日田市教育委員会教育長）

調査事務 後藤 清（日田市教育委員会文化課長）

田中 伸幸（日田市教育委員会文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）

園田恭一郎（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主任）

調査員 土居 和幸（日田市教育委員会文化課埋蔵文化財係主査）

II 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置と地形

求来里平島遺跡は、日田市大字求来里字平島に所在する遺跡で、日田市東部の有田川の支流である求来里川の中流域に位置している。天瀬町馬原に源を発する求来里川は川幅が狭く、すぐ両脇に迫る台地や丘陵の合間を縫うように蛇行しながら西流しており、河川流域沿いは「U」字状の谷地形を形成している。現在この地域ではこうした地形を利用して、主に沖積面では水田耕作を、台地上では日田特産の西瓜や白菜などの畑作栽培が行われている。

遺跡は第2図に示す求来里川を挟んだ一帯を指し、標高約126mの河岸段丘上の沖積面から標高約136mの台地から派生した丘陵先端部を範囲とする。遺跡の東側には標高約190mの町野原台地、また西側背後には標高約145mの元宮原台地といった発達した台地が、それぞれ控えている。

(2) 歴史的環境と周辺の遺跡

遺跡の所在する求来里地区は、近世には求来里村と呼ばれていた地域である。古代律令下においては日田郡五郷のうちの一つで、「豊後風土記」にみえる日下部氏が拠点としていたとされる鞆編郷に属していたと考えられている。地区の東部には『豊後国志』に伝える白鳳9年（社伝は貞観元年）に創祀の元大波羅社が鎮座しており、現在境内には宝篋印塔2基が保存されていて、このうち1基には貞和3年8月の造立年代が墨書されている。また、この元大波羅社の前には「八幡宇佐宮御神領大鏡」にみられる会所道と考えられる道が残り、古くから玖珠へと抜ける交通路として大きな役割を果たしていた。

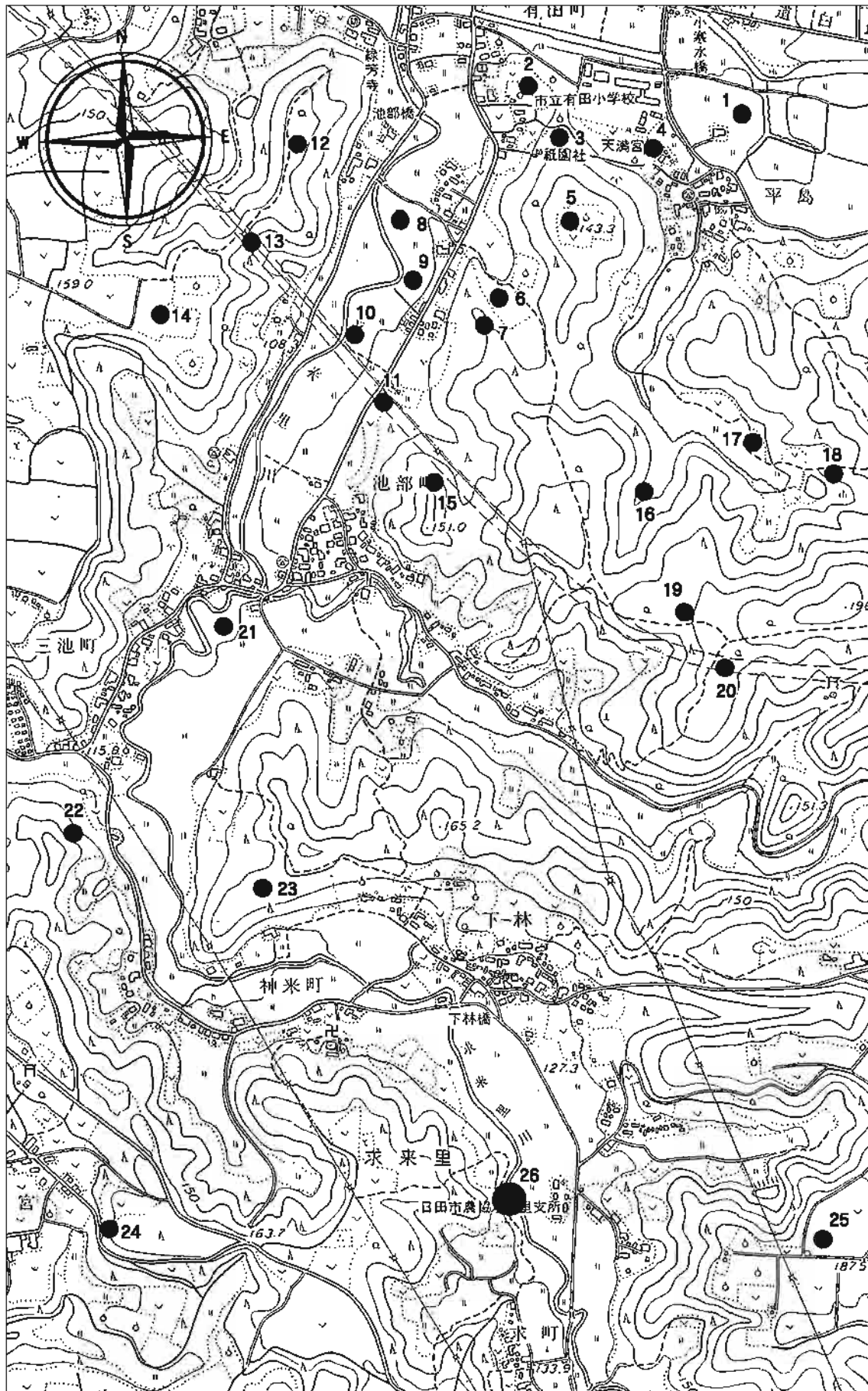
近年、求来里川下流域では高速道路や市道建設、河川改修、木材加工団地、ほ場整備などに伴う大規模な発掘調査が行われ、多くの遺跡の存在や調査成果が得られている。代表的な遺跡を簡単にまとめると、旧石器時代の遺跡例としては馬形遺跡において三稜尖頭器が出土しており、縄文時代の遺跡としては石ヶ迫遺跡の集石遺構（早期）5基や森ノ元遺跡の埋甕（晩期）のほか、長迫遺跡A・B地点や尾漕遺跡4次、有田塚ヶ原遺跡で落とし穴遺構が確認されている。

弥生時代の遺跡例としては祇園原遺跡1・2次での大型建物を含む集落跡（中期～後期）や平島遺跡A・B地点での環濠集落跡（後期）が発掘され、平島遺跡D・E地点では大型成人用甕棺墓（後期）などの墳墓群が調査されている。このほか、馬形遺跡や有田塚ヶ原遺跡でも中期の遺構が確認されている。

古墳時代の遺跡例は多く確認されている。まず古墳には尾漕1号墳（5C末）や箱式石棺を主体部とする2号墳（4C末～5C初）、塔ノ本2号墳（6C前）、有田塚ヶ原1号墳（6C後）などがあり、さらに平島横穴墓群では86基の横穴墓（6C中～7C前）が、大迫遺跡では石蓋土壙墓（5C後）など26基、元宮遺跡では箱式石棺墓（6C後）など6基の墳墓がそれぞれ調査されている。このほかにも、未調査ではあるが中尾古墳群やガニタ古墳群なども知られている。また、集落関係では長迫遺跡A～C地点では100軒を超える竪穴住居跡や掘立柱建物などで構成される大規模集落（後期）が調査されたほか、尾漕遺跡1次でも集落跡（後期）が発掘されている。

古代の遺跡例には、馬形遺跡での土壙墓（9C）やクビリ遺跡での鍛冶遺構（8C）のほかに、長迫遺跡A～D地点や尾漕遺跡、有田塚ヶ原遺跡でも竪穴住居跡などが発掘されている。

中世の遺跡例には、尾漕遺跡1次での310枚の六道銭が埋納されていた土壙墓（14C後～15C中）や森ノ元遺跡での土壙墓（12C）がある。また、集落関係では尾漕遺跡1～6次において掘立柱建物などが調査され、また近世の遺跡例としては祇園原遺跡1・2次において近世墓59基が調査されている。



- 1 平島遺跡A・B地点
- 2 平島遺跡C・D地点
- 3 塔ノ本古墳
- 4 平島古墳
- 5 祇園原遺跡
- 6 長迫遺跡
- 7 尾漕2号墳
- 8 尾漕遺跡5次
- 9 尾漕遺跡4次
- 10 尾漕遺跡2次
- 11 尾漕遺跡1・6次
- 12 中尾古墳群
- 13 大迫遺跡
- 14 中尾原遺跡
- 15 尾漕古墳
- 16 クビリ遺跡
- 17 石ヶ迫遺跡
- 18 平島横穴墓群
- 19 有田塚ケ原遺跡
- 20 有田塚ケ原古墳群
- 21 森ノ元遺跡
- 22 馬形遺跡
- 23 ガニタ古墳群
- 24 元宮遺跡
- 25 町野原遺跡
- 26 求来里平島遺跡

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/10,000)

Ⅲ 調査の内容

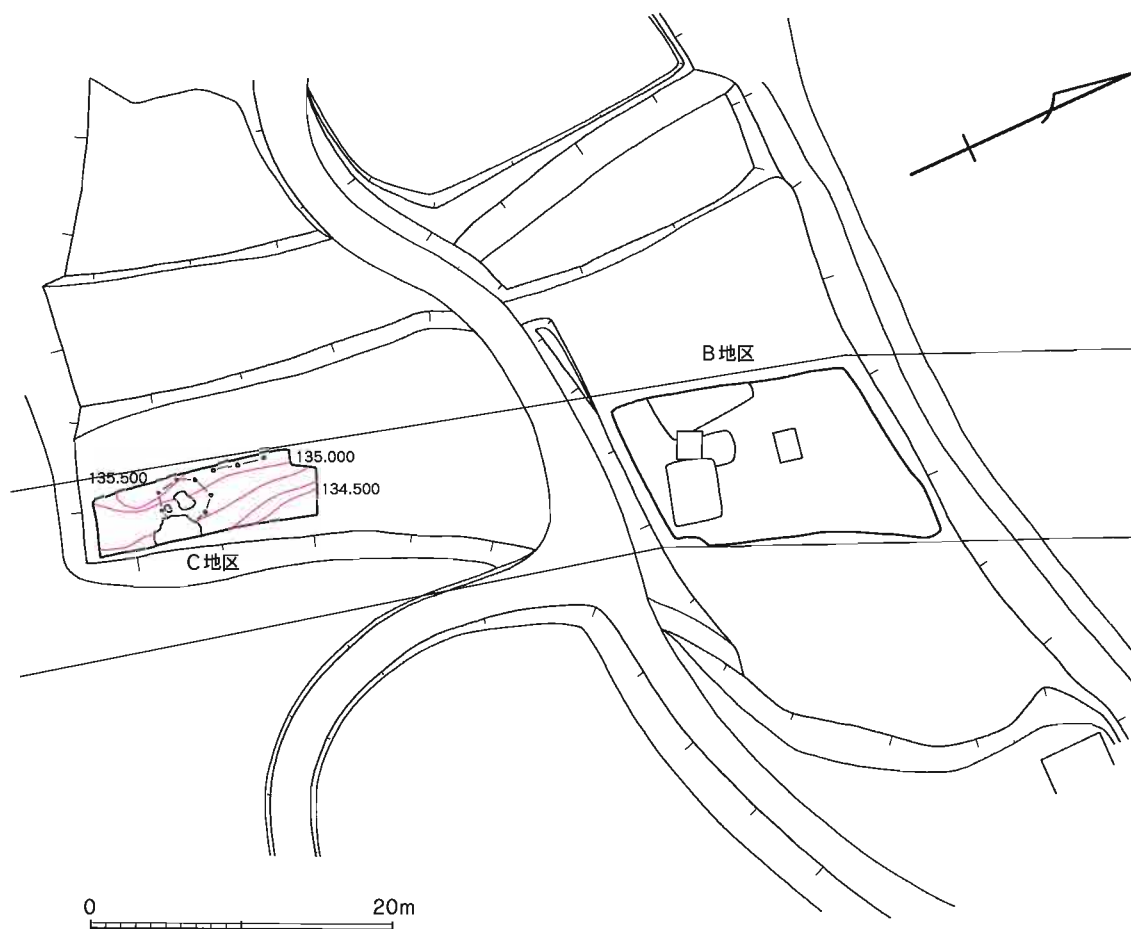
(1) 調査の概要

今回発掘調査を行ったB・C地区の位置は、求来里川左岸の元宮台地から派生した標高約135m前後の低丘陵地上にあたる。両地区は隣接しているが、調査区が里道を挟んで分かれることから北側をB地区、南側をC地区と呼ぶこととした。このうちC地区の北側については表土剥ぎ段階で遺構が広がらないと判断したので土置場とし、また東側については段差が1 m以上あったことから調査対象外とした。

B地区は現表土から約30cmで地山に達し、地山は茶褐色土を基本に、その下位には礫混じりの褐色土が堆積している。地山面はほぼ平坦をなしており、検出した遺構は竪穴住居跡3基、竪穴1基である。これら検出遺構の残存状況は良くない。

C地区は現表土から約30cmから1.3mで地山に達する。地山はB地区と同様に茶褐色土の下位に礫混じりの褐色土が見受けられる。地山面は西側から東側へと傾斜しており、検出した遺構は竪穴住居跡1基、建物1棟?であり、ほかに攪乱坑1基を検出した。これら検出遺構の残存状況は良くない。

なお、B地区の調査面積は184㎡、C地区の調査面積は62㎡である。



第3図 調査区周辺の地形図 (1/500)

(2) B地区の遺構と遺物

本地区の遺構は、第4図のとおり調査区の南側に集中するように検出したが、検出した遺構以外にはピット等の遺構は見受けられなかった。このB地区での採集品には、今回図示はしていないが青磁碗や染付の破片などがある。

以下、B地区の報告に際して、1号竪穴住居跡についてはカマド2基の存在が確認され竪穴住居の建て替えが行われていると判断されることから、新しい竪穴住居跡を“1号A竪穴住居跡”とし、古い竪穴住居跡を“1号B竪穴住居跡”とする。従って、それぞれの竪穴住居跡に付設されているカマドについても、前者を“1Aカマド”と呼び、後者を“1Bカマド”と呼ぶこととした。

また、1号竪穴については、調査段階では1号土壙と2号土壙に区別していたが、それぞれの遺構から出土した遺物が同一個体であることが判明したため、本報告において1号土壙と2号土壙を含めたところで“1号竪穴”と呼ぶこととする。

1号A竪穴住居跡(第4・5図)

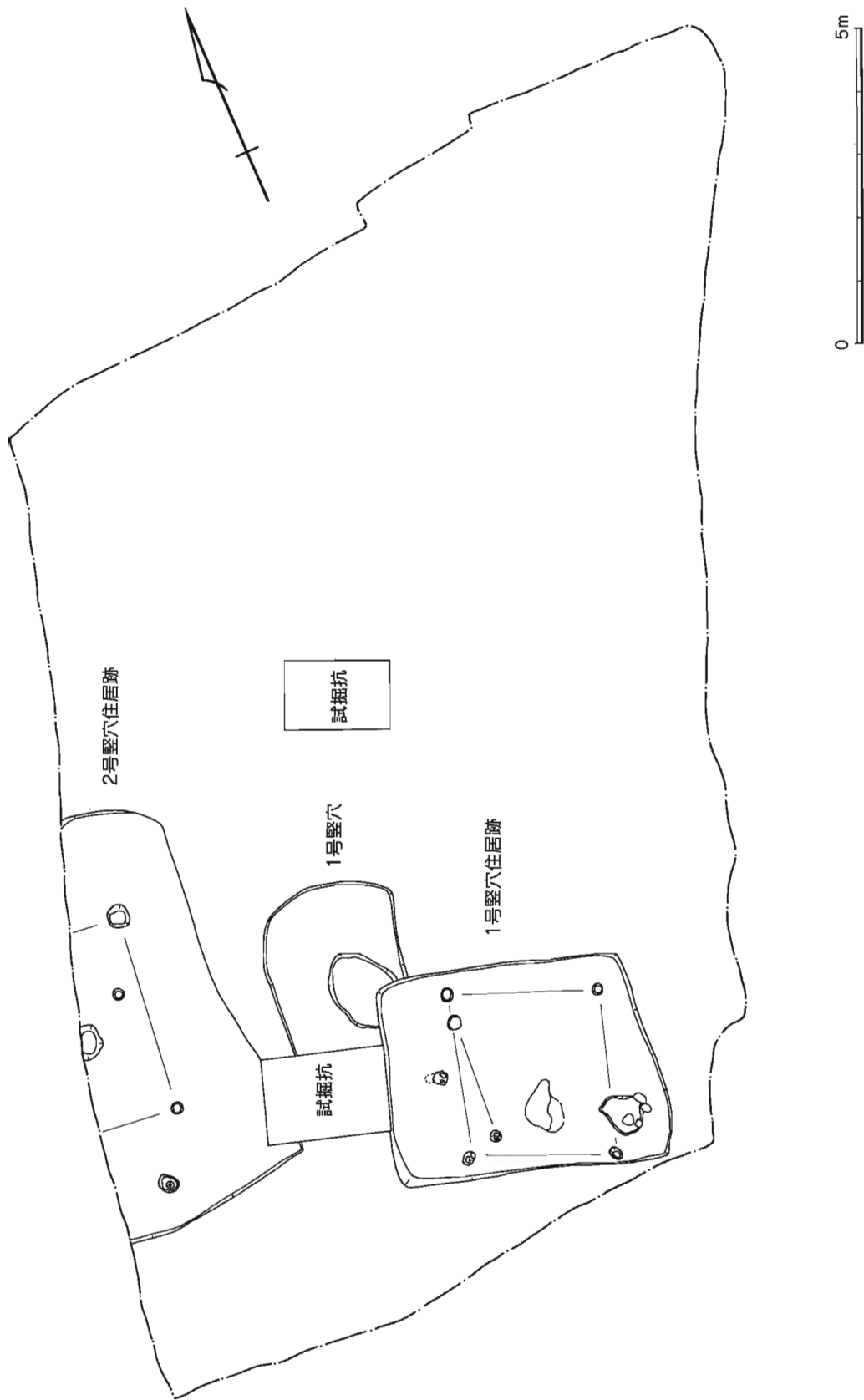
この竪穴住居跡の規模は長辺が4.45m、短辺が3.35m、深さ約15cmを測り、平面形は長方形プランをなす。竪穴住居の床面の面積は13㎡である。主柱穴はP1～4の4本柱構造と考えられ、各柱間間の距離はP1～P2が2.4m、P2～P3が2.6m、P3～P4が2.45m、P4～P1が2.64mを測る。壁周溝は存在しておらず、また貼床の痕跡も認められなかった。竪穴住居の南東コーナーには1Aカマドが付設されており、竪穴住居跡から出土した遺物の大半はこの1Aカマドからの出土である。1Aカマド以外の遺物の出方は散発的で、竪穴住居中央やや北側の床面直上の位置からは、40cm×20cmの大きさの台石が出土している。なお、本竪穴住居跡は1号竪穴と切り合い関係にあり、1号竪穴を切る。

1Aカマド(第6図)

付設の1Aカマドについては竪穴住居跡の南西隅から内部へ80cm程の場所に、両壁のほぼ中心となるように配置している。カマドに伴う袖は残っていないが、焚口部分には50～60cm程の不整形を呈する深さ約5～10cmの浅い掘り込みが見られ、内部には多くの焼土や炭が混入していた。この掘り込み内部の南側には焼土塊が残り、すぐ南には上面が6cm、下面が10cm真四角で高さ15cmの方柱状をなす安山岩製の支脚が備えられており、その表面は赤く焼けていた。また、焼土塊の東側には2個の凝灰岩製の袖石が残り、北側の袖石の下には固定するための小ピットが掘られている。焼土塊の西側には袖石や小ピットの痕跡は認められなかった。また、遺物は第6図に示すように焚口から南側の壁際にかけて集中して出土しており、その出土レベルは大半が床面直上であり、カマド解体後に廃棄されたものと考えられる。

出土土器(第7図)

1・2は甕である。1は口縁部が直立気味に外反する。2は口縁部が直立気味に外反し、胴部の上部に最大径があるものの、口縁部の最大径とはさほど差がない。内外面とも変色が見られ、二次焼成を受けた痕跡を残す。3は高杯の坏部で脚部を欠く。口縁部は直線的に長く外反し、端部は開く。上半部と下半部には稜が認められる。二次焼成を受けた痕跡を残す。4～8は椀である。4・5とも口縁端部は外反する。6～8は半球形状をなし、口縁部は直立もしくは内湾する。2～4、6・7は1Aカマド周辺からの出土である。



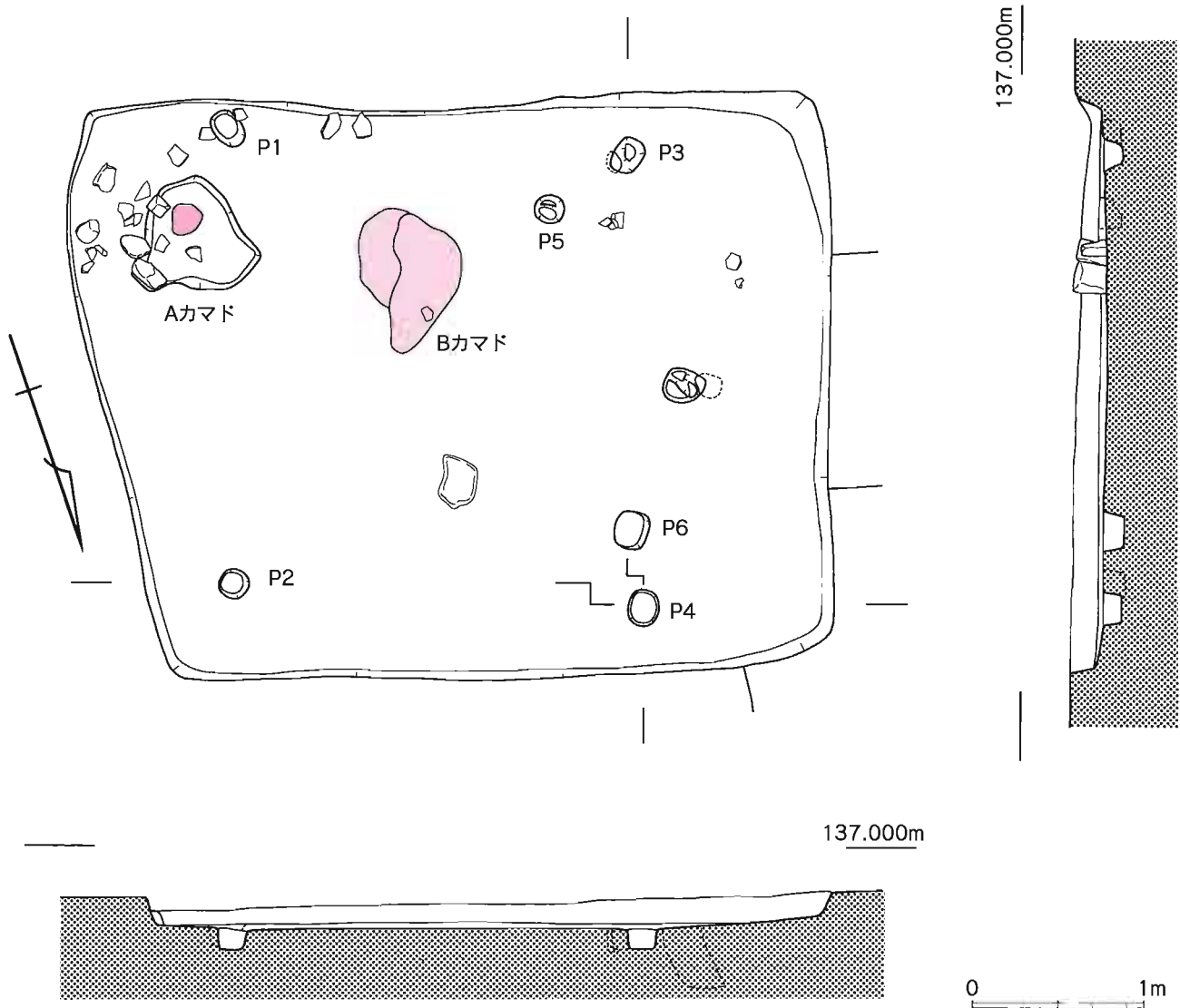
第4图 B地区遺構配置図 (1/100)

出土石器（第8図）

1・2とも2次加工剥片である。1は縦長剥片を素材とし、ネガ面の右側辺部にポジ面側からの加工が施されている。2は横長剥片を素材とし、下部に加工が施されている。片面には自然面を残す。いずれも腰岳産黒曜石である。

1号B竪穴住居跡（第4・5図）

この竪穴住居跡の規模は1号A竪穴住居によりはつきりとはしないが、1Bカマドの位置からして南北約3.3m、東西約3mと推定され、平面は方形プランをなすものと考えられる。床面の面積は約9㎡と推定される。主柱穴はP5・6の2本柱と考えられ、柱間間の距離は1.9mを測る。1号A竪穴住居跡と同様に南東コーナーに1Bカマドが付設されていたと考えられる。本竪穴住居に伴う遺物は1Bカマドや主柱穴からは出土していない。



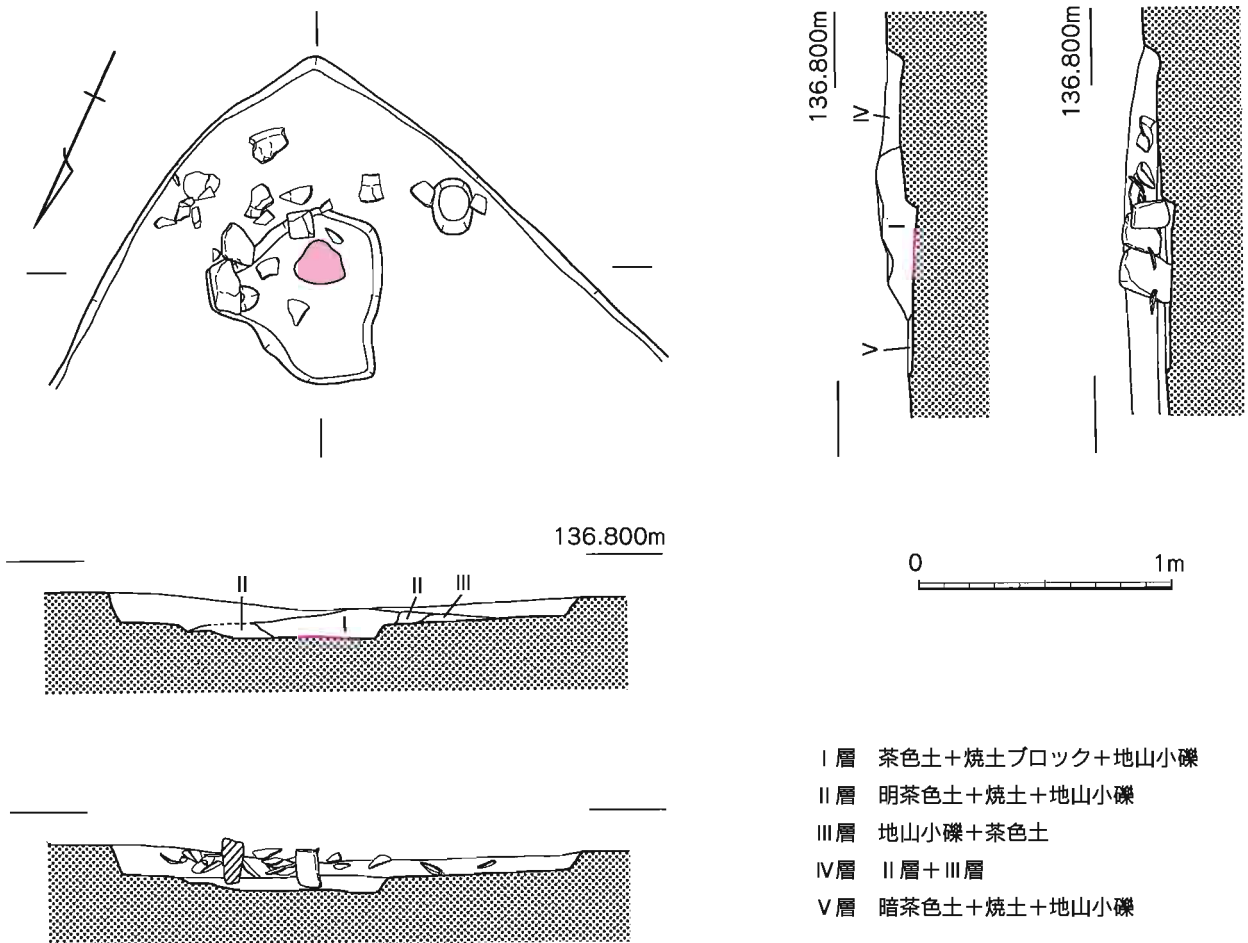
第5図 1号A・B竪穴住居跡実測図（1/40）

1 Bカマド

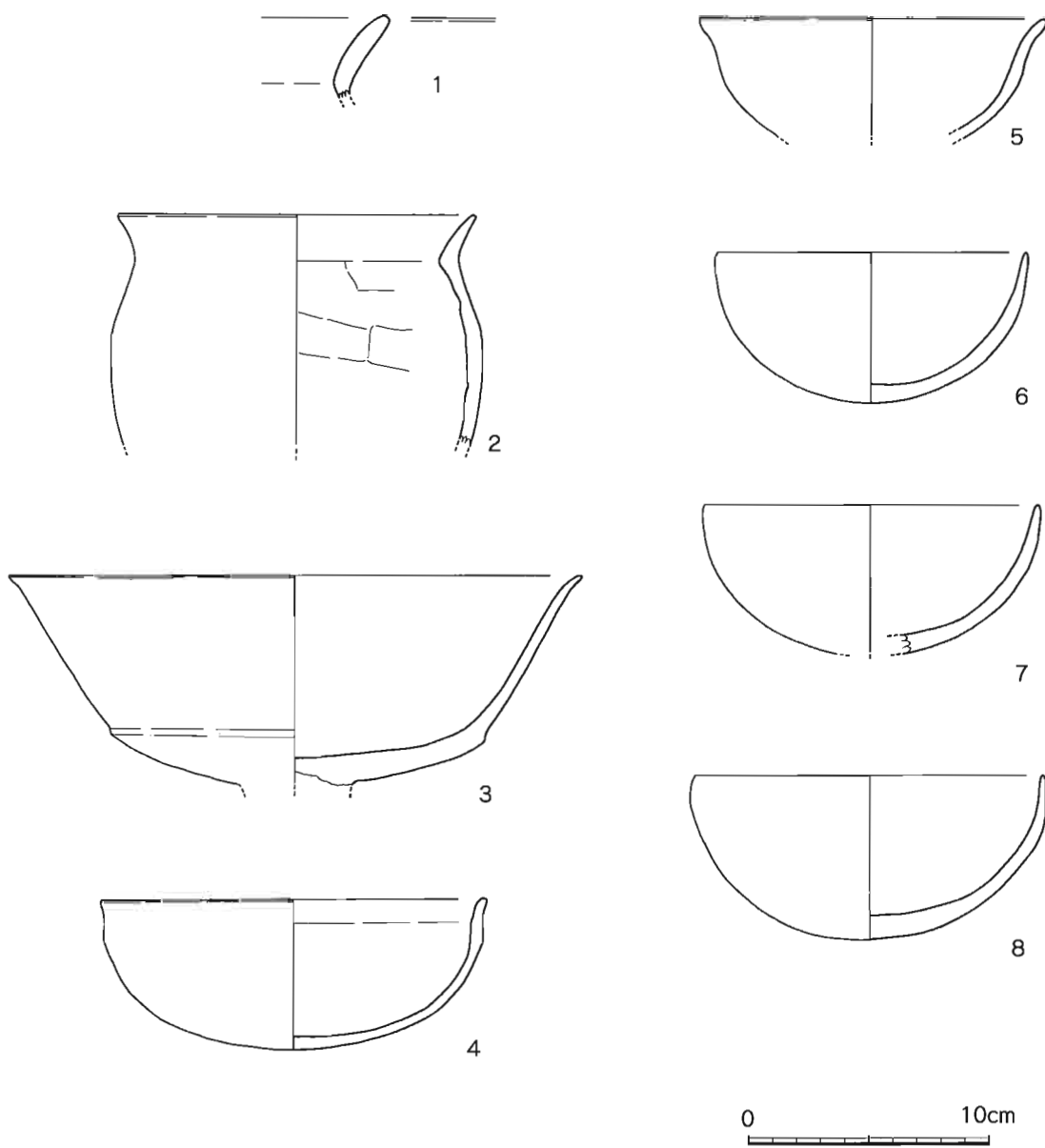
このカマドについては、調査中は1 Aカマドの焼土や炭をこの場所に廃棄したと思っていたが、焼土面は固く焼けており、焼土面のほぼ中央部には支脚を設置していたと考えられる円形小ピットが確認されたことから、カマドと判断した。1号A竪穴住居を構築する際に大半は破壊されたものと考えられる。1 Bカマドは1 Aカマドと同様に1号B竪穴住居跡の南側壁中央から内部へ1 m程の場所に配置されており、袖石やその痕跡は残っていなかった。

2号竪穴住居跡 (第9図)

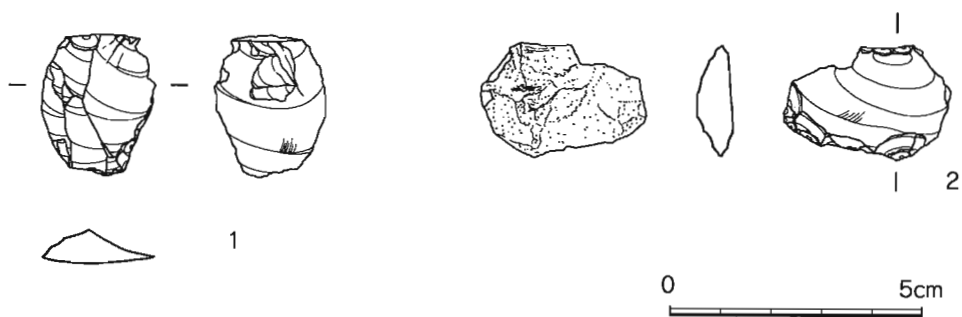
調査区の西側で検出した竪穴住居跡で、長辺6.56m、短辺3 m + α 、深さ約15cmを測る。竪穴住居はさらに西側の調査区外へと伸びている。遺構の残存状況が悪く、東側壁面付近では上場ラインがやっと確認出来るほどである。支柱穴はP 1とP 2が該当し、その柱間寸法は約3.2mを測る。竪穴住居の中央部と考えられる場所に焼土や炭を混入する炉跡が存在することから、4本柱構造の竪穴住居跡と考えられる。炉跡は50cm前後の円形をなすと考えられ、深さ約45cmを測る。壁周溝や貼床の存在は確認することが出来なかった。また、南東コーナー近くの壁際には粘土ブロックの塊が認められた。遺物は竪穴住居南側に散布していたが、大半は土器小片であり、図示できる遺物はほとんどない。



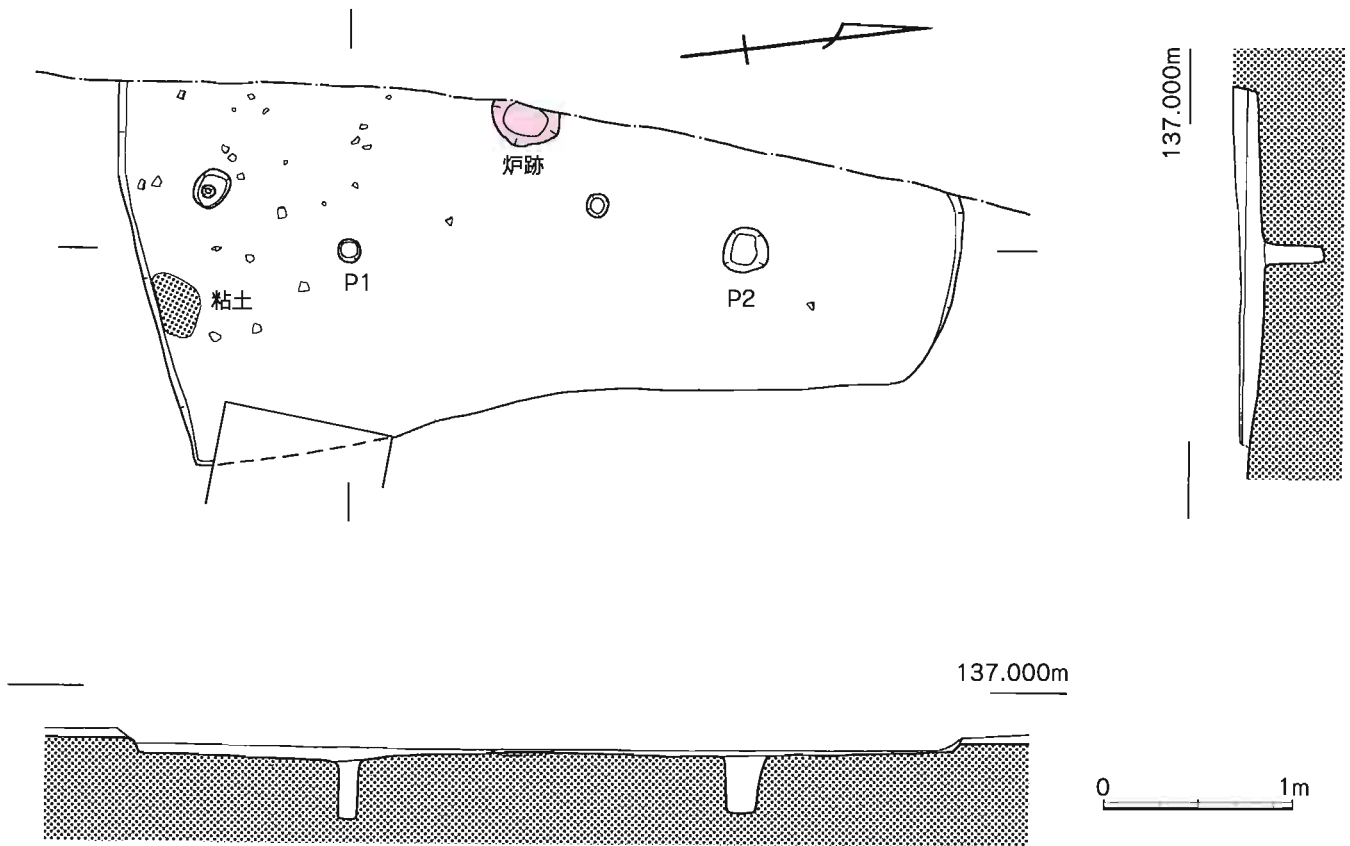
第6図 1号A竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第7图 1号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第8图 1号竖穴住居跡出土石器実測図 (2/3)



第9図 2号竪穴住居跡実測図 (1/40)

出土土器 (第11図-1)

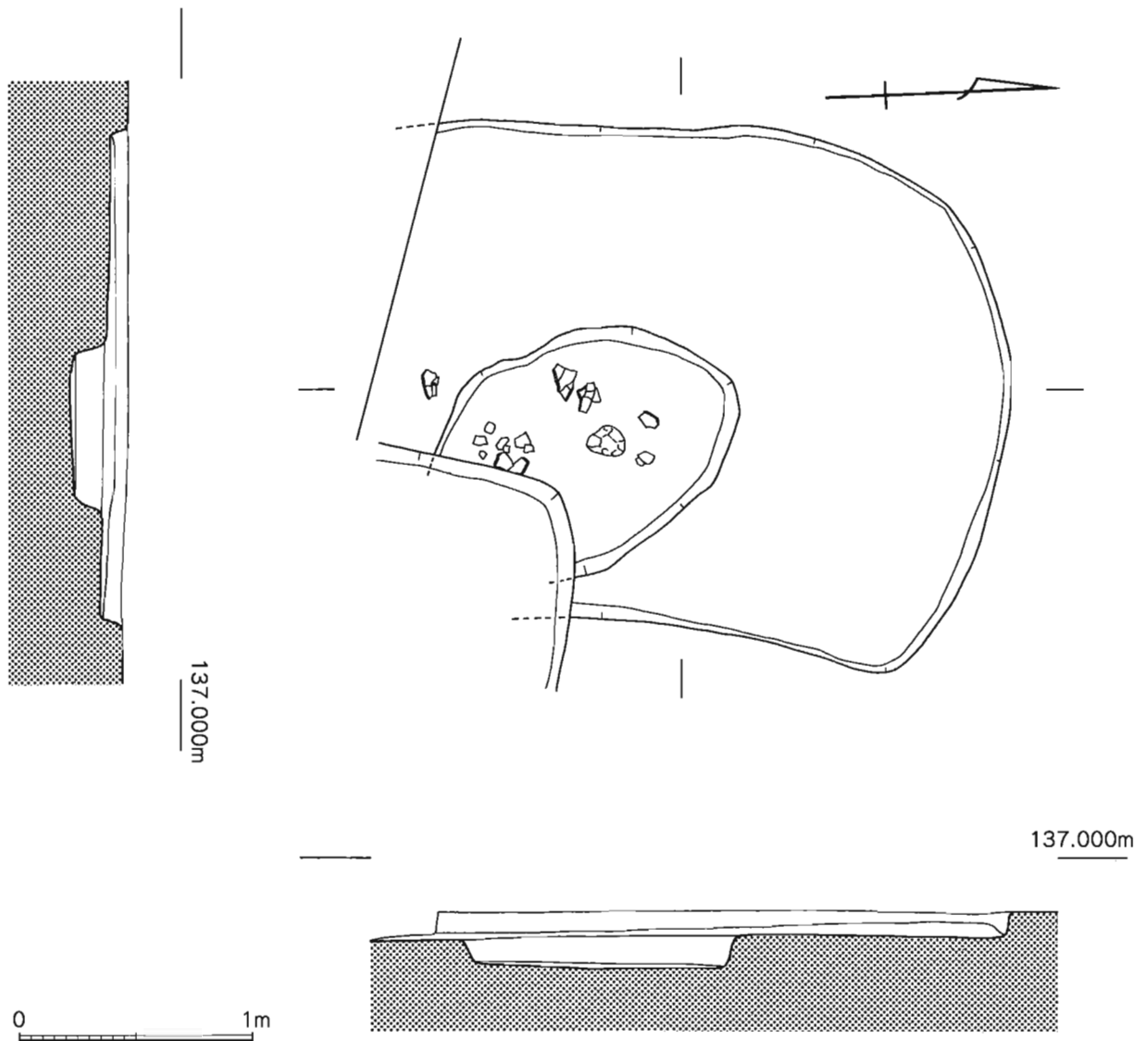
図示できる遺物はほとんどなく、唯一1点のみ掲載した。1は小型の甕とも考えられるが、形状や大きさから小型丸底壺であろう。内面にはケズリが施されている。

1号竪穴 (第10図)

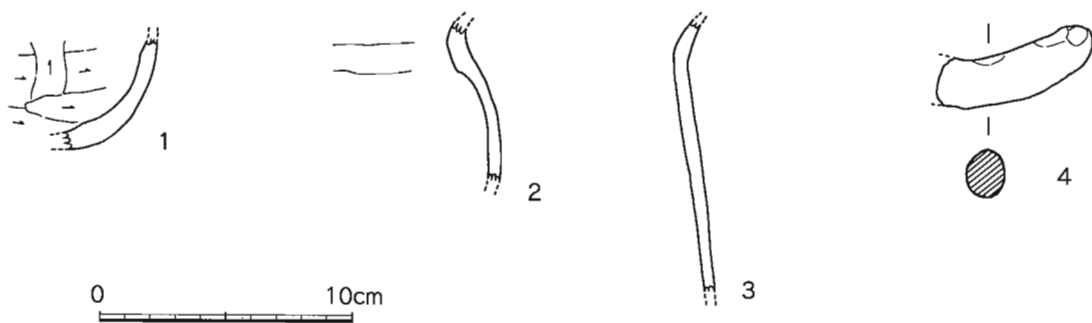
1号竪穴住居跡の西側に位置しており、1号竪穴に切られる。竪穴の規模は長辺が $2.7\text{m} + \alpha$ 、短辺が 2.18m 、深さ 15cm 前後を測り、平面形は隅丸長方形プランをなす。遺構の残存状況は悪い。竪穴の中央東側には楕円形を呈する土壌が伴う。その規模は長辺が $0.9\text{m} + \alpha$ 、短辺 1m 、深さ 10cm 前後を測る。遺物は土壌内部とその周辺から出土した。

出土土器 (第11図-2~4)

2は甕である。内面にはケズリの痕跡が見られる。3は甕であろう。胴部は直線的で、口縁部は外反する。4は甕の把手である。3と4は胎土や色調が類似し、また出土位置も近いことから同一個体と考えられる。いずれの土器も磨耗が著しい。



第10图 1号竖穴实测图 (1/30)



第11图 2号竖穴住居跡・1号竖穴出土土器实测图 (1/3)

(3) C地区の遺構と遺物

C地区はB地区と異なり、丘陵斜面を削って水田を成形したことによって、調査区西側から東側に向かって傾斜がきつく、調査区内での高低差約1mを測る。また、本地区の遺構についてはB地区と同様に削平が著しく、検出した遺構以外にはピット等の存在は見受けられなかった。

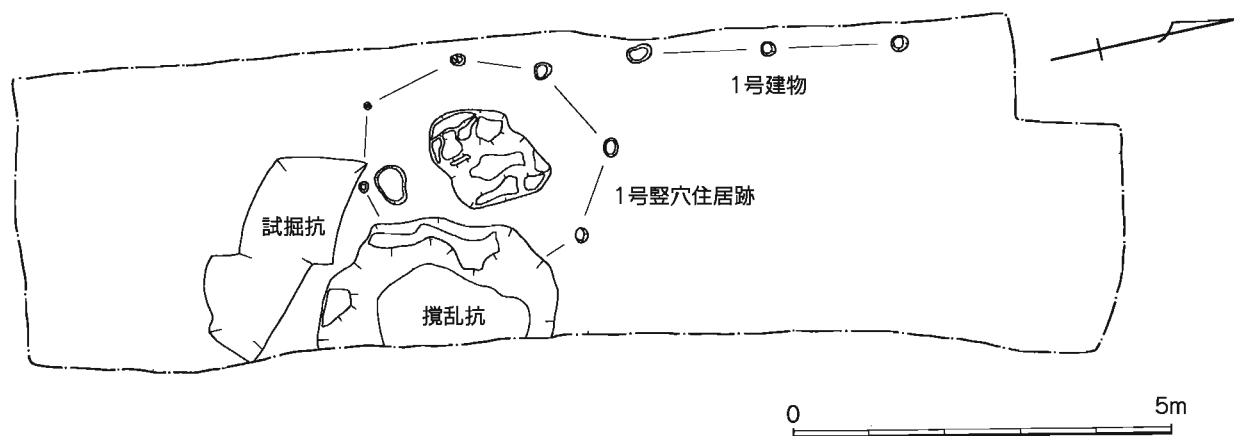
なお、攪乱坑については風倒木痕の可能性も考えられるが、調査中に土層ではっきりと確認することが出来なかったため攪乱坑として報告する。この攪乱坑については、図示した土器のほかにも須恵器片などの土器小片が出土している。

1号竪穴住居跡 (第12・13図)

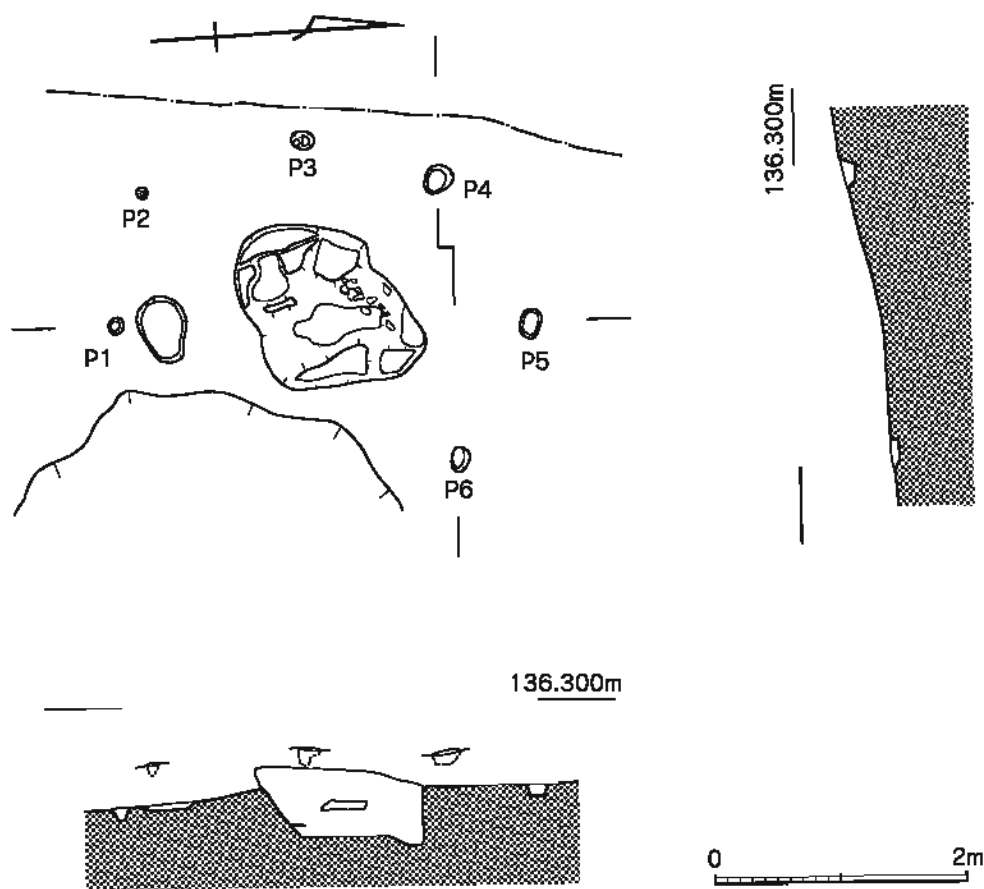
調査区のほぼ中央部で検出した竪穴住居跡で、壁面や貼床等は削平を受けているため柱穴、炉跡しか残存していない。主柱穴はP1からP6までの6つ残っており、ほぼ円形に巡っている。P1やP6の東側にも1ないし2つの主柱穴があったと考えられるが、攪乱坑に切られているため残っていない。主柱穴の柱間寸法はP1～P2が1.07m、P2～P3が1.28m、P3～P4が1.25m、P4～P5が1.35m、P5～P6が1.23mを測る。主柱穴の深さは10cm前後と残りは良くないが、6つの主柱穴の底面が残っていることからして傾斜に沿うように掘られたものと考えられる。また、主柱穴の中央部には不整形の土壌が存在し、木の根によると思われる攪乱を受けていたが、埋土の一部に炭や焼土が混入していたことから炉跡と判断した。炉跡は現存での長辺が約1.4m、短辺が約1m、深さは最深で0.5mを測る。この竪穴住居跡はP1とP5の直線距離が3.3m、P2とP6の直線距離が3.2mであることから、直径4～5m前後の規模であったと推定される。このほか、P1の北側には長辺が約0.5m、短辺が約0.4m、深さ0.1m前後の楕円形を呈する小土壌が見られるが、竪穴住居に伴うものかどうかははっきりしない。調査段階では弥生時代の円形竪穴住居跡の一部と考えていたが、遺構からは弥生土器が出土しておらず、また一部攪乱を受けているとはいえ炉跡から縄文土器が出土しているため、縄文時代の遺構と判断した。

出土土器 (第14図)

炉跡の内部から出土した土器で、粗製の深鉢形土器である。土器の磨耗がひどく、胴部下半を欠く。器形胴部が内側に屈曲し、そのまま直線的に立ち上がり、頸部は外に開く。ほぼ真っ直ぐ立ち上がる口縁部の外面に2条の平行沈線が巡っている。



第12図 C地区遺構配置図 (1/100)



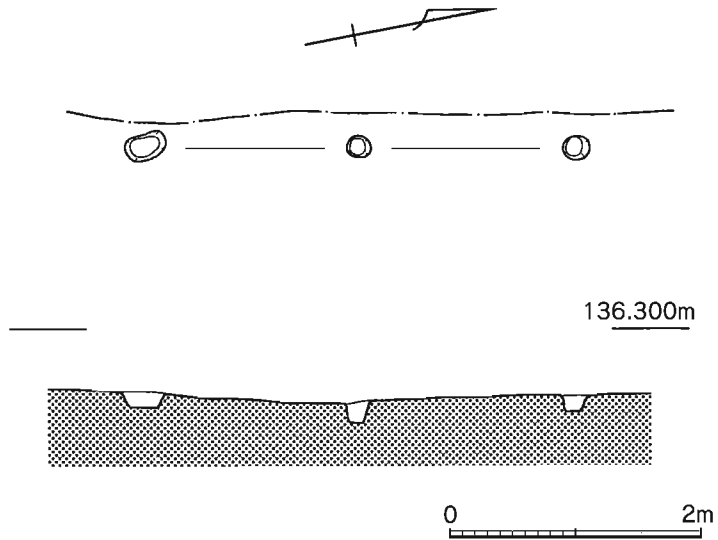
第13图 1号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第14图 1号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

1号建物（第15図）

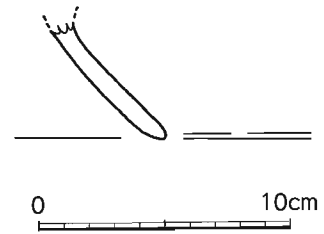
調査区の西側隅で検出した。大ききや深さがほぼ均一の柱穴3つが南北方向に並び、一見すると柵列とも考えられるが、竪穴住居跡の削平が著しいなかにあつて柱穴の残りが良いことから、建物の一部と判断した。2間×1間+αの規模が想定される。柱間寸法はP1～P2が1.7m、P2～P3が1.72mである。建物の時期については柱穴から遺物が出土していないためはつきりしないが、埋土の様子からすると中世より新しくはならないと考えられる。



第15図 1号建物実測図（1/60）

攪乱坑出土土器（第16図）

図示可能な遺物はほとんどなく、破片が数点あるのみである。図示した遺物のほかにも、甕あるいは壺の胴部と考えられる弥生土器片もある。図示した土器は高杯の脚部と考えられる。



第16図 攪乱坑出土土器実測図（1/3）

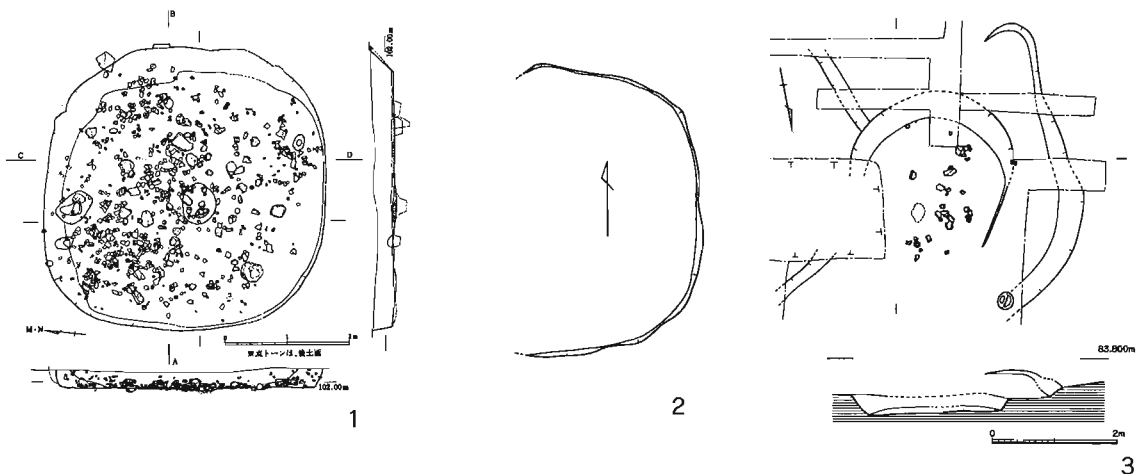
IV まとめ

今回の調査ではB地区においては竪穴住居跡3軒と竪穴1基、C地区においては竪穴住居跡1軒と掘立柱建物1棟が確認された。以下、簡単にまとめることとする。

縄文時代の遺構について

この時期の遺構にはC地区1号竪穴住居跡がある。この竪穴住居は弥生時代の円形竪穴住居とも考えられたが、遺構から弥生土器が出土しておらず、近接のA地区において同時期の土壌が確認されていることから、縄文時代の竪穴住居跡として捉えておきたい。竪穴住居跡は削平が著しく、壁面は残っておらず、円形に巡る6つの主柱穴と攪乱をうけた炉跡が残るのみであった。これら付属遺構の東側は攪乱坑によってさらに破壊を受けているため、その状況からして主柱穴は8つ前後あったものと推定される。この竪穴住居跡に伴う遺物としては、唯一炉跡内から縄文土器が1点のみ出土している。土器の胴部は「く」状に屈曲し、口縁部外面には2本の平行沈線を巡らせている特徴から、大石式に比定でき、後期末の所産と考えられる。

さて、これまでに確認されている日田市内での縄文時代の竪穴住居跡は、第17図に示すように手崎遺跡^(註3)、葛原遺跡^(註4)、尾部田遺跡^(註5)で調査例があり、それぞれの遺跡で1軒ずつ発見されている。手崎遺跡C地区1号竪穴住居跡(第17図1)は、直径約4.5m四方の隅丸方形(報告では円形と隅丸方形の間)住で、炉跡は存在するが主柱穴は存在していない。西平式土器が出土し、後期中葉の時期に比定されており、市内では最も古い事例である。葛原遺跡I区の竪穴住居跡(第17図2)は4.6m×2.8m以上の隅丸長方形もしくは隅丸方形プランと考えられ、三万田式土器が出土している。尾部田遺跡の竪穴住居跡(第17図3)は径約2.5mの円形プランで、御領式土器が出土している。このように日田盆地では後期中葉から後葉にかけての竪穴住居の平面プランは西平式が隅丸方形、三万田式が隅丸長方形もしくは隅丸方形、御領式が円形を呈する。



第17図 日田盆地の縄文時代の竪穴住居跡 (1/120)

さらに、この時期の筑後川上・中流域での事例をみると、日田盆地より上流の玖珠盆地では都原遺跡^(註6)で西平式土器を伴う後期中葉の円形竪穴住居跡2基が、釘野千軒遺跡^(註7)では西平式から三万田式土器を伴う後期中葉から後葉の円形竪穴住居跡6基が発見されている。また、下流の浮羽郡の柳瀬遺跡^(註8)では中期中葉から後葉の隅丸長方形や円形の竪穴住居跡7軒が、朝倉郡の長島遺跡^(註9)では西平式土器を伴う後期中葉の円形竪穴住居跡が2基発見されている。とくに後者は九州横断自動車道建設に伴う調査例の一つで、関連の調査では高原遺跡、柿原I遺跡、山ノ神遺跡、金場遺跡、笹隈遺跡、クリナラ遺跡、小覚原遺跡^(註10)などで晩期の方形や長方形プランの竪穴住居跡が発見されている。このように筑後川上流から中流域における後期中葉から晩期にかけての竪穴住居の平面プランについては、西平式は円形+隅丸長方形、三万田式は円形+隅丸長方形もしくは隅丸長方形、御領式が円形プランをなし、晩期には方形や長方形プランへと変化する様子が窺える。

このような状況から求来里平島遺跡C区1号竪穴住居跡については、一時期前の尾部田遺跡では円形プランをなしていることや、嘉穂町アミダ遺跡A-3号住^(註11)や伊坂上原遺跡11号住居跡^(註12)の例に見られるように、支柱穴を円形に配する平面形が円形を基本としたプランであった可能性が高いと考えることができる。近年、日田市内では縄文時代の遺跡が調査されるケースが増えており、今後日田地域内でも類例が増加するものと予想され、該期の集落の実態も明らかとなっていくであろう。

古墳時代の遺構について

この時期の遺構はB地区において検出しており、1号A・B竪穴住居跡、2号竪穴住居跡、1号竪穴が該当する。これらのうち、すでに切り合い関係が認められている遺構の存在から、1号竪穴→1号B竪穴住居跡→1号A竪穴住居跡の順に作られたことが判明している。それぞれの遺構の年代については、1号竪穴住居跡のうち、新しい1号A竪穴住居跡からは付設されたAカマドを中心に、個体数は少ないものの土師器の甕・高坏・椀がセットで出土し、これら出土土器には須恵器は伴わないが、カマドは付設されている。市内ではこの時期の遺跡の調査例が少なく、カマド出現以前の遺構としては、石ヶ迫遺跡^(註14)や荻鶴遺跡^(註15)、陣ヶ原辻原遺跡4号竪穴^(註16)などがある。石ヶ迫遺跡7号竪穴の場合は高坏と小型丸底壺、荻鶴遺跡竪穴(鍛冶)遺構は甕・壺・高坏・小型丸底壺、陣ヶ原辻原遺跡4号竪穴では甕・高坏・小型丸底壺・椀がそれぞれ共伴している。これらの遺構は中期前半から中頃に比定され、1号A竪穴住居跡の出土土器に小型丸底壺が共伴せず、椀の占める割合が高いことを考慮すると、これらの遺構より新しい時期と考えられる。また、市内でのカマドを有する竪穴住居跡の古い事例としては、長者原遺跡の1号竪穴住居跡^(註17)がある。ここでは、甕・甑・椀などとともにMT15の須恵器の坏蓋や甗が共伴しており、すでに須恵器を伴いカマドを有する点からして、下限は後期前半代と捉えられる。このように市内では、MT15より古いカマドを有する竪穴住居跡の比較可能な好資料がないため、今回は近隣の浮羽町仁衛門畑遺跡^(註18)における浮羽郡の古墳時代中後期の土師器編年を参考に見ていくこととする。まず、甕については口縁部が直線的にのびていることから同編年の6期以前に、高坏は脚部を欠くものの坏部は深く、屈曲部に段を有し、直線的に外傾する器形からみて5~6期に、椀は口縁部が外反するもの(第7図4・5)と直立するもの(第7図6~8)の2種類見受けられ、口径が13~16cmであることから6期以後と考えられる。こうした点に、1. 小型丸底壺が共伴していないこと、2. 一括遺物の器種組成のなかで椀の占める割合が高いこと、3. 須恵器が共伴していないこと、4. 甑が出土した1号竪穴を切ることを考慮すると、概ね同編年の6期に比定できそうである。また、この1号A竪穴住居跡より古い1号

竪穴には、把手付大型甕が出土していることを踏まえると同じ6期の範疇に該当し、1号B竪穴住居跡についても遺物は出土していないが6期に該当しよう。

また、B地区2号竪穴住居跡については依存状況が悪く、良好な遺物も出土していないため時期判断に苦しむが、小型丸底壺と考えられる土器片が出土していることや、竪穴住居跡内に前期に見られる屋内土壌やベッド状遺構が設置されておらず、さらには南側壁には粘土塊が残っているなどの理由から、仁衛門畑遺跡での炉跡を持つ竪穴住居跡がカマドを有する竪穴住居跡と並存もしくは先行する例と同様のあり方と考え、先の1号竪穴住居跡や1号竪穴と同様又は先行する時期と捉えておきたい。よって、B地区の遺構のうち、1号A・B竪穴住居跡と1号竪穴については同編年をそのまま当てはめれば中期中葉の5世紀中頃に比定できそうであるが、この求来里平島遺跡でのカマドの出現が浮羽郡と同一であるかどうかは今後の日田地域での資料の増加を待つ必要があることから、中期中葉から後葉までの幅のなかで留めておきたい。

次に、竪穴住居の構造であるが、1号B竪穴住居跡は平面がほぼ3m四方の方形プランで、2本柱を有し、南東隅にカマドを付設していたと推定される。建て替え後の1号A竪穴住居跡は平面が4.45m×3.35mの長方形プランで、4本柱を有し、南東隅にカマドを付設する。このように2つの竪穴住居のカマドは南東隅に付設されている。このような事例は塚堂遺跡D地区5号・6号A（新）住居跡^(註19)に見受けられる。いずれも一辺が4mを超えない程度の小型の住居で、主柱穴は前者が3つ、後者は無主柱穴としている。筑後川流域での出現期のカマドが持つ特徴の一つにカマドの支脚から壁までの距離が長い点が指摘されているが、本B地区1号A竪穴住居跡の場合も、コーナー隅から約60cmの距離があり、塚堂遺跡D地区5号竪穴住居跡や同遺跡6号A（新）竪穴住居跡とほぼ同じ距離である。しかも、MT15の須恵器を共伴する市内長者原遺跡の1号竪穴住居跡カマドの場合^(註21)は30cmと短く、事例は少ないものの筑後川流域沿いでの特徴と一致し、こうした竪穴住居隅にカマドを付設する例が大分県内には類例が認められないことから、日田盆地へのカマドの普及が地理的な条件を考えれば当然のことであろうが、筑後川下流域からの影響によるものと理解できよう。

最後に、カマド祭祀についてであるが、B地区1号A竪穴住居跡のカマドをみると、土層観察からは祭祀行為の状況を十分に把握することは出来なかった。しかも、カマドの埋土などからは手捏土器などの明瞭な祭祀行為を示す遺物は出土していない。しかしながら、竪穴住居内の遺物の出土状況は大半がカマド周辺に限られており、住居内にはほとんど遺物は残っていない。しかも、カマドからの出土遺物はカマドに残る支脚と同レベルの住居床面近くから出土しており、少なくともカマド本体が無くなってからの遺物である。こうしたことや、カマドからの出土遺物のうち甕と高坏には2次焼成の痕跡が認められることをも考慮すると、この竪穴住居の廃絶とともに、カマド本体を壊し、支脚や袖石は残したままにして、その後土器を埋置し、カマドの機能停止を行なう祭祀行為があったものと考えられることができそうである。

以上、B地区の遺構は日田盆地内でのカマド出現期の一様相を示しているといえる^(註22)。求来里川を挟む対岸のA地区においても、5世紀後半代の竪穴住居跡数基が検出されていることから、この求来里平島遺跡は盆地内における古期のカマドを有する集落である。こうした集落のあり方などについてはA地区の報告に委ねると同時に、今後A地区周辺では圃場整備事業等による発掘調査が予定されていることから、調査が実施されれば当該期の集落の全体像がはっきりとしてくるであろう。

- 註1) 坂本嘉弘 「東九州における縄文時代晩期開始の問題－大野町夏足原遺跡採集の遺物紹介を兼ねて－」 『おおいた考古』
第6集 大分県考古学会 1993年
- 註2) 年代については、水ノ江和同氏の年代観に従う。(水ノ江和同 「北部九州の縄紋後・晩期土器」 『縄文時代第8号』
縄文時代文化研究会 1997年)
- 註3) 田中裕介ほか編 「日田市高瀬遺跡群の調査2」 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
大分県教育委員会 1998年
- 註4) 土居和幸編 「葛原遺跡」 『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1998年
- 註5) 行時志郎編 「尾部田遺跡」 日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001年
- 註6) 綿貫俊一編 「都原縄文時代集落遺跡発掘調査報告書」 九重町文化財調査報告第20輯 九重町教育委員会 1994年
- 註7) 綿貫俊一編 「釘野千軒遺跡」 『大分県埋蔵文化財年報4』 大分県教育委員会 1996年
- 註8) 小田和利編 「長島遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第55集 福岡県教育委員会 1999年
- 註9) 小田和利編 「長島遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第55集 福岡県教育委員会 1999年
- 註10) 井上裕弘編 「鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡」、伊崎俊秋編 「高原・口ノ坪西遺跡」、中間研志編 「柿原Ⅰ縄文遺跡」、
中間研志編 「クリナラ遺跡・若宮遺跡」、伊崎俊秋編 「笹隈遺跡」、伊崎俊秋編 「楠田遺跡・小覚原遺跡・二十谷
遺跡・陣内遺跡・上野原遺跡」、中間研志編 「金場遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第22・31・37・
43・44・49・54集 福岡県教育委員会 1992～1999年
- 註11) 福島日出海編 「嘉穂地区遺跡群Ⅶ-アミダ遺跡-」 嘉穂町教育委員会 1989年
- 註12) 村井真輝ほか編 「伊坂上原遺跡」 熊本県文化財調査報告第78集 1986年
- 註13) 高橋信武氏は、西平式以降の竪穴住居跡の平面プランを集成し、天城式の段階には福岡県は方形系統、熊本県は円形系統
に統一され、古閑式の段階には方形系統の分布が拡大・南下するとの考え方を示している。筑後川上流域にあたる日田
盆地では、西平式以後はつきりとした方形は確認されていないが、西平式以降も円形を認めうることができようである。
(高橋信武 「縄文晩期の方形竪穴住居跡について」 『列島の考古学 渡邊誠先生還暦記念論集』 渡邊誠先生還暦記
念論集刊行会 1998年)
- 註14) 行時志郎編 「有田塚ケ原遺跡群」 日田市教育委員会 1999年。遺跡から出土した土器については、担当者の行時桂
子氏よりご教示いただいた。
- 註15) 行時志郎編 「萩鶴遺跡」 日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995年
- 註16) 田中裕介編 「日田市高瀬遺跡群の調査1」 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大
分県教育委員会 1998年
- 註17) 土居和幸編 「長者原遺跡」 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』 日田市教育委員会 1987年
- 註18) 重藤輝行編 「仁右衛門畑遺跡Ⅰ(古墳時代以降編)」 一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集
福岡県教育委員会 2000年
- 註19) 馬田弘稔編 「塚堂遺跡Ⅳ D地区」 一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
1985年
- 註20) 註18) と同じ。
- 註21) 註17) と同じ。
- 註22) 平成14年度に日田市教育委員会が調査中の大肥条里大肥地区において、縄文土器を伴う古式のカマドが調査されてい
る。担当者の渡邊隆行氏よりご教示いただいた。

第1表 出土遺物観察表（土器）

地区名	遺構名	挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調
					口径	底径	器高	外面	内面			
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-1	土師器	甕	-	-	-	ハケ後ナデ	ナデ	ABCDEFGHI	良	黒茶褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-2	土師器	甕	14.8	-	-	ハケ?	ケズリ	ABCDEFGHI	不良	赤褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-3	土師器	高杯	23.7	-	-	ナデ	ナデ	ABCDEFGHI	良	赤褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-4	土師器	椀	13.0	-	6.2	ハケ後ナデ	ナデ	ACDEH	良	橙褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-5	土師器	椀	13.8	-	-	ナデ?	ナデ?	ABCEH	良	茶褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-6	土師器	椀	14.4	-	6.8	ハケ後ナデ	ナデ	ABCDE	良	橙褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-7	土師器	椀	14.2	-	-	ナデ	ナデ	ABCE	良	灰褐色
B地区	1号竪穴住居跡	第7図-8	土師器	椀	16.0	-	6.2	ハケ後ナデ	ナデ	ABCDE	良	灰黒褐色
B地区	2号竪穴住居跡	第11図-1	土師器	小型丸底壺	-	-	-	ナデ	ケズリ	ABCDEFGHI	良	黄褐色
B地区	1号竪穴	第11図-2	土師器	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	ABCDE	良	暗茶褐色
B地区	1号竪穴	第11図-3	土師器	甌	-	-	-	?	?	ABCE	良	黄褐色
B地区	1号竪穴	第11図-4	土師器	甌	-	-	-	?	-	ABCE	良	黄褐色
C地区	1号竪穴住居跡	第14図-1	縄文土器	粗製深鉢	-	-	-	ナデ	?	AC	良	暗赤茶色
C地区	攪乱坑	第16図-1	土師器	高杯	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCDEFGHI	良	黄褐色

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 出土遺物観察表（石器）

地区名	遺構名	挿図番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
B地区	1号竪穴住居跡	第8図-1	2次加工剥片	黒曜石	2.8	2.2	0.7	3.7
B地区	2号竪穴住居跡	第8図-2	2次加工剥片	黒曜石	3.2	2.2	0.7	4.5

写 真 图 版



B地区の航空写真（真上から）



C地区の航空写真（真上から）



B地区1号竪穴住居跡の発掘状況



B地区1号竪穴住居跡の発掘状況



B地区1号壑穴住居跡カマドの発掘状況



B地区1号壑穴住居跡カマドの完掘状況



7-2



7-7



7-3



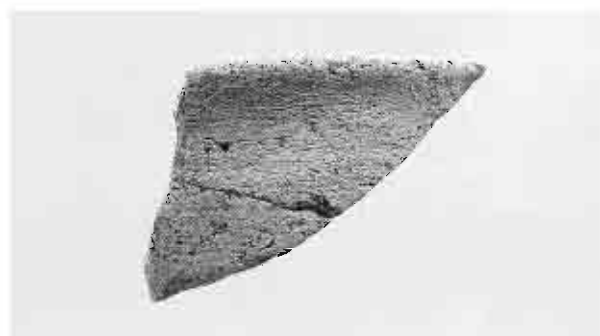
7-8



7-4



14-1



7-5



8-1



7-6



8-2

報 告 書 抄 録

ふりがな	くくりひらしまいせき
書名	求来里平島遺跡
副書名	県営日田地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	4
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	38
編著者名	土居和幸
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2002年12月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
求来里平島遺跡	大分県日田市 大字求来里字平島	44204-6	651196	33度 18分	130度 78分	19940214 ~19940223	B地区 184㎡ C地区 62㎡	農道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
求来里平島遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	竪穴住居跡 1軒 竪穴住居跡 3軒、竪穴 1基	縄文土器 土師器	中期のカマドを有する竪穴住居

ふくとらしま
永来里平島遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第38集

平成14年12月27日

発行 日田市教育委員会

〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限公司

〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8